

---

# 人間になった猫

闇夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人間になった猫

### 【Nコード】

N4577B

### 【作者名】

闇夜

### 【あらすじ】

ある日猫は恋をした。野良猫だった自分に居場所を与えた少女に。でも少女に思いはつたわらない、そして少女は病気で倒れた。でも猫は一生少女を愛し続けた。

ずっとずっと昔、まだ子供だったころ、話を聞いたんだ。

『人間になった猫の話』

その猫には名前がなかった。

ボロボロで痛んだ真っ黒な毛の猫。

緑色の瞳がいつも何処かを眺めてる。

一人ぼっちの野良猫

その猫があるとき恋をした。

レンガ作りの家に住む少女。

金髪のおしとやかな可愛い少女。

いつも窓から外を見ている。

猫と同じ、光のない目で・・・

ある日、猫がレンガに乗って少女のことを見ていた。  
すると少女も猫に気づきいて手を差し伸べた。

「こっちにおいで、寒いでしょ」

少女の手が優しく猫を抱きしめて、部屋の中に入れてくれた。  
あったかい手のぬくもりが居場所のない猫を安心させる。

「ねえ、ネコさん、お外は楽しい？」

少女は猫に話かける。

伝わらないと分かっているけど、話すことをやめない。

伝わると信じているから。

「私ね、お外に出たことがないの」

猫はずっと少女のに抱き抱えられたまま『ミャー』と一声ないた。

「え？なんでだって・・・・・・・・・・・・・・・・私とても  
重い病気なの。だからお母さんが外に出ちゃダメだって」

少女の目が徐々に輝きを失う。  
暗くなり、薄く涙がたまる。

このとき猫は恋におちた。

同じ目をした少女、この先に何もない。

恐怖で震える毎日。

少女と猫は同じだった。

それから猫は毎日のように少女の元を訪れた。

少女も毎日のように猫をだいた。

ぎゅっと暖かい手で。

猫がボロボロの泥まみれで来ても、少女は綺麗にしてくれて、またぎゅっと抱きしめてくれた。

いつしか、そこが猫の居場所になった。

居場所を見つけた猫

未来の見えない少女

いつか猫の目には光が戻り始めた、しかし少女は違った。

ある日、いつものように少女は猫を抱えてた。

しかし、いきなり猫は腕から解き放たれた。

それと同時に少女は咳き込み、しゃがみこんでしまう。

こんどは騒動を駆けつけ白髪のおじいさんがやってきた。

「お嬢様、大丈夫ですか？」

少女をベットの上に寝かす。

「この野良猫め、お前がお嬢様を」

そういつて襲い掛かって来た。

猫は傷だらけになりながらもその場を逃げ出す。

猫は初めて自分が少女を苦しめてることを知った。

それでも猫は毎日少女の元に来た。

でも、少女はベットで寝たきりで動いてくれない。

猫は毎日窓辺に花を一本おいってった。

雨の日も

風の日も

雪の日も

そうやって何日も過ぎていった。

猫は唯見ていることしかできなかった。

時々おじいさんに見つかって傷だらけになっても

毎日花をくわえてきた。

傷だらけになり、ボロボロになり、居場所がなくなっても

猫は少女を愛し続けた。

いつしか目が見えなくなり、耳が聞こえなくなり、上手く体が動か  
なくとも。

猫は毎日花を添えた。

二度目の冬がきて、花を銜えたまま猫がたおれた。

そのとき、声が聞こえたのだ。

優しい女のこの声、心の中に響いた。

『黒猫よ、お主は少女を愛し続けた、あきらめることをしなかった。どんなに傷ついても少女に愛を運んでいた。その努力を評して死ぬ前に一つだけ願いをかなえて進ぜよう』

猫はこのとき切に願った。

『僕を人間にして、もう一度少女に合いたい』

『その願い、かなえて進ぜよう』

猫の体が消え、少女の部屋に一人の少年が舞い降りた。

緑いろの目をした少年

かつて光を失った目、今はすべてが見える。

少年は少女の下にそっと寄り添い頬に手をあてる。

柔らかいまだ年端もいかぬ肌。

自分のせいで、もう一生触れないと思っていた。

光をくれた人に何もしてあげられないと思っていた。

でも、今、この命を懸けてすることができる。

こんどは僕が少女に光を与える。

少年は少女にぎゅっと抱きついた。

人間の一生なんて儂い

猫の一生なんてもっと儂い

そのすべての気持ちをこめて少女に抱きついた。

その後、人間になった少年は跡形もなく消え去った。

それがこの話の終焉である。

この話を聞いて僕は悲しく、その夜、よく眠れなかったのを覚えてる。

あつ、そういえばこの話は確か祖母が話してくれたんだっけ。

輝く目の金髪の祖母が。



## （後書き）

へんな話ですけど、最後まで読んでいただきありがとうございます。  
まだ未熟ですので、誤字などがありましたら教えてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4577b/>

---

人間になった猫

2010年12月22日02時46分発行